

## 私の一冊

社会福祉学科 石野育子 先生

### 竹田恒泰著 『日本はなぜ世界でいちばん人気があるのか』

小鹿図書館 : 361.5/Ta 59 (PHP新書)

在学中の学生さんよりも 3 倍も長く生きてきて、改めて私の一冊は何かと問われてみると、これはとても難しい選択になりました。人生さまざま局面もあって、その時々に出会うそれぞれの書物が、自分に進むべき方向を示してくれたことがありました。また、文中にあったあの言葉が、迷いの渦の中から助け出してくれることもありましたが、どれもこれも古い話になりました。そこで、学生さんと共有できる最近のことから、私の一冊を探していこうと思います。

私は東日本大震災のころ(2011年3月11日)から、「なぜかな…」と気になっていたことがありました。そんな気持ちを言い当ててくれたような本のタイトルに出会いました。それが本書です。この本は、大震災の2か月前に発行されているので、私と同じ関心から生まれた本ではありません。

東日本大震災の時、救助を待つ多くの人々を、テレビはライブで映し出していました。私はテレビにくぎ付けになり底知れない恐怖を感じながら見っていました。数日後、この被災地の人々の姿に対する思いがけない賞賛の言葉を、海外ニュースによって知りました。それは、甚大な被害にあいながらも冷静さを失うことなく譲り合い、礼節を忘れず立ち直ろうとする被災地の人々の姿を褒め称えるものでした。この時点では、私自身はなぜ海外のニュースから褒められるのかはわかりませんでした。海外ニュースが褒めていたことは、日本人であればだれもが行うであろうと思ったことだったからです。

このニュースをきっかけに注意して調べてみると、2005年に米国南東部を襲ったハリケーン「カトリーナ」の被災の後、住民が暴徒化してショッピングセンターを襲撃し、他にも普通の一般市民による略奪事件が多発していました。また2008年の中国四川大地震では被災者2000人が暴徒化し、米国以上の略奪・殺傷事件がありました。最近のことでは、2013年11月11日のフィリピン台風の被災地で、被災者が食料を求め暴徒化し略奪行動があったと報道されました。このような他国の事情から「日本人の精神に学べ」という賞賛の意味が少し分かるようになりました。

他にも2005年に、国連の「女性の地位委員会」でノーベル平和賞受賞者のケニア環境副大臣ワンガリー・マータイ氏が、日本語の「もったいない」を環境保全の合言葉として紹介し、会議の参加者とともに唱和した(詳しくは本書91頁参照)ことの報道もありました。2010年ごろからは、クール・ジャパンという言葉が聞かれ、マンガ、アニメ、ファッション、食材、伝統工芸、家電など広範囲にわたる日本独自の文化が海外で評価されていることも知りました。つまり東

日本大震災の前から、日本特有のこれらの文化が、誇らしいことだと評価されていることは知りつつも、世界でいちばん人気があるという実感には程遠いものでした。

著者の竹田恒泰氏は、明治天皇の玄孫に当たる家柄で、いくつかのマスメディアで取り上げられているので知っている人は多いと思います。10代のころから多彩な海外経験を持ち、憲法学、史学、環境学を専門とし著作が多く、世界平和のための活動も行うなどきわめて活動的で多弁な学者であり作家です。

私は今回紹介した本の他、同じ筆者の2冊の本も読み進めました。

○竹田恒泰著 『日本人はなぜ日本のことを知らないのか』(PHP新書) 2011.9.29

○竹田恒泰著 『日本人はいつ日本が好きになったのか』(PHP新書) 2013.10.2

3冊同時に読んだことになったため、それぞれの本の区別が難しくなりましたが、一番心に残ったのは、「世界中の国民が知っている自分の国の成り立ちを、日本人の多くは答えられない。初代天皇の存在は伏せられ、『古事記』『日本書紀』は非科学的として封印される。何より、日本が現存する世界最古の国家である事実を学校は教えてくれない。まるで誇りを持たせたくないかのような歪んだ歴史教育。戦争もなく統一を果たし、中国から独立を守り抜いた奇跡の歩みを紐解こう。世界でいちばん人気がある日本を、私たち自身が愛せるように。」(『日本人はなぜ日本のことを知らないのか』より)と、筆者が繰り返し絶叫するように訴える主張です。これらの著書は、多くの引用・参考文献が提示されている学術書と思われます。

筆者に言われて私も初めて気づきました。日本の成り立ちが学校教育で教えられていないということ。私の子供の時代はまだ、明治生れの祖母と大正生まれの母がいて、天照大神の神話から日本の成り立ちを教えてくれることがありましたが、学校教育では全く触れられていません。こうした戦前・戦後を知る老人との接触がない今の若い人たちにとっては、日本の建国の経緯は全く闇の中に閉ざされているし、さらに第二次大戦後の日本についても学校教育で教えられていないことが多すぎると感じました。こういう状況下では、日本人としてのアイデンティティはどこで形成されているのでしょうか。

日本国民と天皇との関係、日本国憲法、愛国心、領土、日本人の歴史認識などなど今日的な話題に、これらの著書は多くの示唆を与えてくれることになると思います。日本が世界でいちばん人気があるということ、言葉どおりに楽観的に理解するのではなく、世界との関係で日本を考え、自分自身の立つ位置を理解することとして捉えていきたいと思っています。

県立大グローバル地域センター長の竹内宏氏が、静岡新聞の『論壇』(2014.7.6)で、「楽観的にみる『空気』の危険」というテーマを上げて述べていました。それは、今年のサッカーワールドカップのことです。試合前にジャーナリズムは、楽観的ムードで優勝の可能性さえありそうな予測をしているものが多かったが、実際観戦してみると世界一流チームとの技術格差に愕然としてしまった。こうした日本人の楽観的展望は、第二次大戦のころを思い出させた。英米の陸海空軍にも圧勝するかのように宣伝が行きわたり、それを信じていた国民が少なくなかったからであると。

日本人が抱きがちなこうした楽観的にみる「社会的な空気」の危険について十分に自覚しながら、世界との関係を考えていかねばならないことを改めて認識しました。そのうえで、今回紹介したこれらの本が主張する、日本についての原点ともなる新しい視座を学び取っていききたいと思いました。